

ジャン＝ジャック・バレ教授特別講座報告書

2019年10月25日（金）ジャン＝ジャック・バレ教授(ジュネーヴ高等音楽院・室内楽科教授)による特別講座が行われました。バレ教授は2016年より毎年来校され、今回は4回目の講座となります。今回の受講生は大学院生3組、午前はヴァイオリンとピアノによるブラームスのヴァイオリンソナタ「雨の歌」より第1、第2楽章、午後はベートーヴェンのピアノソナタ Op.2-2 より第1、第2楽章、Op.111 より第1楽章でした。

ブラームスのヴァイオリンソナタは2時間続きで行われ、1楽章冒頭部分のボーイングに始まりピアノの音のバランスの取り方、アンサンブルにおける2人の音楽の運び方など、大変細やかで内容の濃いレッスンでした。受講生たちの音楽がどんどん変化していき、聴講している人達もブラームスの世界に引き込まれていきました。午後のベートーヴェンのソナタ Op.2-2 の1楽章ではスタッカートに対する感じ方や、ハーモニー進行をよく理解し感じられるようにゆっくりハーモニーだけを弾くという練習方法が紹介されました。細かい音を省きハーモニーの変化だけになることで理解を深めることができました。ベートーヴェンで大切なことはリズムとハーモニーで、その点を正しく理解し生き生きとしたエネルギーを保つことが重要であるというお話をいただきました。2楽章では弦楽四重奏を意識して D-dur という太陽の明るさの中でゆったりと歌っていくように、ということでした。暖かい音色に包まれ、午後の至福の時間となりました。Op.111 ではゆっくり練習するときの注意事項としてテンポで演奏するときの表現をすべて取り入れながらゆっくり確認するというお話をいただきました。そうすることによって表現に合ったテクニックが身についていくので大変重要である、とのことでした。バレ教授の的確なご指導により大変充実した一日となりました。

